



WEB

東京家政大学附属女子中学校・高等学校

発信と交流が育む力

緑苑祭

中学校

歌声と創造力が響き合う

例年と同じく三木ホールにて合唱祭が行われました。あいにくの雨天にもかかわらず、多くの保護者の皆さまにご来校いただきました。生徒たちは、保護者の皆さまの声援を受け、曇天を吹き飛ばすような元気一杯の歌声を三木ホールに響かせました。各学年および各部活動の展示発表では、中3学年および作成した巨大なシーサーの張り子をはじめとする、附属中学生の工夫をこらした展示活動を見ることができました。



A校舎玄関(高校本部会が装飾を担当)

高等学校

情熱あふれる舞台

今年度は38団体が緑苑祭に参加しました。雨天にも関わらず、保護者の皆さまはもちろん、大勢の一般のお客さまにもご来校をいただきました。そのおかげで、販売を行った団体では、終了時刻になる前に売り切れとなった販売団体が複数出ました。毎年、好評を頂いている中庭ステージでは、雨が一時的に上がったタイミングを狙い、ダンス部と書道部が予定していたパフォーマンスを披露することができました。直前まで中庭ステージで出



中2学年 家政は世界を救い隊

来るか出来ないかという状況だったので、無事にパフォーマンスが終了した時には、部員たちは安堵の表情を浮かべ、中庭ステージは温かい拍手に包まれました。

ターム留学

中学校 高等学校

留学で広げる視野と未来

今年度も高校1年生が2名、7〜9月の約3か月間オーストラリアでのターム留学に挑戦し、オーストラリアのアデレード近郊で、ホームステイをしながら現地校に通いました。先日帰国した二人は、苦労したことも前向きに楽しみながら、とても充実した日々を過ごせたそうです。自分の将来の目標をさらに明確に描けるようになった、と話してくれました。また、今年度から中学3年生もニュージーランドのオークランドにある中高一貫校に派遣をしています。一学期として参加した生徒は、壁にぶつかった時に支えてくれた、周りの人々への感謝の気持ちも話してくれました。



▲現地の仲間たち

自分の目で見た世界は、これからさらに広がっていくことでしょう。

参加した学生の声



異文化にふれ、広がる視野と学び
高1 A.Kさん

私は留学を通して、国や文化による価値観の違いを学び、多様な視点を持つ大切さを実感しました。現地では教会や病院での医療活動にも関わることが多かったため、今後も医療に携わる経験を積んでいきたいです。また、英語力をさらに伸ばすため、洋楽や映画などで日常的に英語に触れ続けたいです。



食を通して学んだ、文化と心のつながり
高1 K.Aさん

今回の留学では、食文化の違いについて知識を深めたいという目的があり、ホストファミリーや友達と料理をたくさん作りました。料理を通してコミュニケーションを深めることができ、目的も達成することができました。この経験から、将来は食に関する研究をしたいと強く感じました。



異文化に学び、世界で輝く自分へ
中3 O.Kさん

私は将来英語を使った心理学の仕事に携わりたい、と考えていました。留学中は様々な文化に触れ、たくさんの刺激を受けました。これからはもっと英語の勉強をして将来的に世界で活躍する女性になりたいです。



▲オーストラリア現地校にて

世界を生きる



学校法人 渡辺学園 理事長
菅谷 定彦

理事長コラム No.23

日経米州編集総局長時代9

7回もの海外出張、取材

日経産業部次長、部長時代

1974(昭和49)年10月、3年間の充実した日本経済新聞ニューヨーク特派員を終え、東京編集局産業部第3部次長兼編集委員に就任した。部長は日経の頭脳といわれた井上毅さん。井上さんはのち「産業部活性化のため円城寺次郎社長にお願いして菅谷君をもらい受けた」と話したが、産業部第3部は化学・繊維・紙パルプ、食品・住宅・建設、レジャー・サービスと1973(昭和48)年10月の第一次石油ショックの対応等で動きの激しい分野。その中、編集局長賞、同奨励賞を圧倒的多数受賞するなど活性化してきた。

その後井上さんが編集局長次長兼日経産業新聞編集長兼産業部第1部長に就任すると私を産業部第1部次長に指名した。第1部は鉄鋼、非鉄、エネルギー、

商社などが担当、視野を広げることが出来た。私は井上さんの精密な分析力から学ぶことが多かったためこの異動を歓迎したが、「森田康常務(のち社長)から「いつまで菅谷君を引っ張り続けるんだ」と叱られた」と話した。

1982(昭和57)年4月古巣の産業部第3部長に就任した。取締役論議主幹(のち常務取締役)に栄転した井上編集長の後任には証券部長として活躍した鈴木隆(のち常務取締役、電子媒体のQUICK社長)である。鈴木さんは頭の回転が速いので朝令暮改がしばしば。「リーダーとして困るので止めてください」と進言すると、「菅谷君、時代の変化のスピードは極めて速い。時として『朝令暮改』もありうる」と返事した。

その鈴木さんと私が組んで展開したのが「ドキュメント新・産業革命」である。日本経済新聞、日経産業新聞の第1面とテレビ東京のプライムタイム(午後10時〜11時)で激動する内外産業を同一テーマ同時進行で報道する新企画で鈴木さんから責任部長に指名された私は新聞編集に責任を持つと同時に、テレビ東京の国保徳丸専務取締役(のちテレビ愛知社長)に協力を要請「菅谷君の幅広い人脈でスポンサーをつけてくれれば指定のいい時間帯を提供、全国放送する」との返事。

たまたまその翌日に商社を担当していた新聞社旧キャブと皆川広宗三菱商事副社長との夕食懇談会があり、その終了後、私が日経メディアミックス構想を話し、テレビ番組のスポンサーになって欲しいと伝えると「面白い、明日返事する」との回答。翌日午後には「テレビの1社独占スポンサーになる」との回答を得、新企画の流れが一気に加速し、二度の石油ショック後の我が国産業界の「重厚長大」から「軽薄短小化」「ハイテク時代」への流れを的確に報道、大きな話題を呼び、日経社長賞に輝いた。

産業部次長、部長時代の16年間は私にとって海外取材出張が相次ぐ時期でもあった。産業部第3部次長兼編集委員時代ニューヨーク特派員から帰国直後の1974(昭和49)年5月、サンフランシスコでの日本・カリフォルニア経済人会議の予備会議。次はニュージーランド特集取材で2週間

現地へ。

産業部第1部次長時代1979(昭和54)年米コロラドスプリングスでの世界鉄鋼連盟総会。1980(昭和55)年秋、経済界主導の「輸入促進ミッション」の1番手として韓国訪問が決まり、植田三男日商岩井社長を団長とし総勢127名の団長顧問で韓国(10日間。直後の12月、バリ島でのOPEC(石油輸出機構)総会取材。

当時の日経は海外出張は社長の許可が必要だったが、OPEC、韓国出張は営業担当時代から日経の販売、広告収入を大きく伸ばし、日本新聞協会会長も務めた大軒順三社長から直接声がかかった。OPEC行きでは日経の石油取材体制について答申を求められた。私は石油のエキスパート記者育成には海外の石油担当記者のように欧米の大学や大学院で石油・エネルギーを勉強させ、原油国首脳と電話一本で話せるような専門記者を育成するのが最善と回答。その後大軒社長の指示で留学者が増加した。

産業部第3部長時代、急逝した大軒社長の後継、森田康社長を団長とする日経訪中団の一員として



1983年4月、日経訪中団メンバーと中国迎賓館「釣魚台」で。左から、筆者、太田哲夫編集局長、森田康社長、飯島敬治論議主幹、岸清専務取締役、一木豊政治部長。

1983(昭和58)年、中国を10日間歴訪(メンバーは写真参照)。日経と中国の関係は1968(昭和43)年、文化大革命中の日本人特派員中、量質とも抜群の仕事をしていた飯島敬治特派員がスパイ容疑で逮捕、一年半投獄されたことで悪化したが、1977(昭和52)年李先念首相が飯島氏に「四人組の仕事で、中国人民を代表してお詫言する」と話したことで決着した。森田ミッションはこれを機に関係を一段と強化するため結成。

北京では最高権力者鄧小平の信頼厚い万里筆頭副首相との面談、人民大会堂での森田社長主催の晩餐会の後、瀋陽(旧奉天)、大連、上海、蘇州の各都市を歴訪、各地の中国政府幹部との懇談を重ねた。北京に到着した夜、中国政府報道局長主催の夕食会の席上、報道局長が、「政府首脳の誰と会談するか明朝知らせる」と言ったので私は「森田社長はじめ日経幹部がそろって訪中したので会談の相手は当日朝とは失礼ではないか」と言うと左に座った飯島さんが小声で「余計な事を聞くな」と左足を靴で踏まれ、中国人通訳も翻訳しなかったが、その後中国歴訪中言っべきことは言う方針は貫いた。

1986(昭和61)年5月から6月、EC(欧州共同体)委員会の招待でベルギーなど5ヶ国歴訪。そして1986(昭和61)年年末、森田社長に呼ばれ、来年3月から日経グローバル化の大きな第一歩としてニューヨーク、ロンドンに編集総局を新設、現在の特派員体制を大増強する、初代米州編集総局長に菅谷君を任命する。重大任務なのでしっかり頼むと言われた。産業部時代の前述した7回もの海外取材で成果を挙げた事が新任務の大きな要因になった。

「日経米州編集総局長時代10」

To be continued